

人類学博物館紀要 第 36 号
(ISSN 0388-8711)

南山大学人類学博物館紀要

第 36 号

南山大学人類学博物館

2018



番澤コレクション 円筒上層式土器

巻頭言

昨年（2016年）12月に、全日本博物館学会と日本展示学会の共催による「ハンズ・オン研究会」を本学において開催した。当初、30名程度の参加という予想だったにもかかわらず、当日はその倍の60名を超える参加者があり、その対応に追われると同時に、ハンズ・オンに対する関心がいかに高いかを実感させられた。

もとより、人類学博物館が目指す「ユニバーサル・ミュージアム」とハンズ・オンとは手法こそ共通するところがあるとはいえ、その出発点は大きく異なる。だが、多くの博物館にとっていきなりユニバーサル化へと転換を図るよりは、まずハンズ・オンを積極的に取り入れていく方が、段階的であり、博物館としてもやりやすい戦略といえるだろう。

だが、ハンズ・オンに限らず、ユニバーサル・ミュージアムでもそうだが、これが単なる五感を使ったアクティビティとなってしまうと、そのこと自体が目的化する恐れがある。問われるのは、ハンズ・オンにしる、ユニバーサル・ミュージアムにしる、その活動を通じて何を伝えるのか、という根本のところを見失いはしないか、と言う点である。それは、かつての体験学習のプログラムが、いつの間にか目的化してしまった轍を踏んではならない、ということでもある。

そのためには、もう一度博物館教育の在り方を見直すことが必要であろう。これまで心ある博物館人にとっては、G.ハインの構成主義が博物館教育の方向性を示してくれるものであった。だが、一つの考え方には有効な反対意見があって初めて学説としての奥行きが出てくる。そんな1冊が小笠原喜康氏の『ハンズ・オン考 博物館教育認識論』（東京堂出版、2015年）であろう。本書が博物館教育についての議論を深める引き金になればと思う。

人類学博物館にしても、ユニバーサル・ミュージアムを目指しているからにはさらにその方向を推し進めていかなければならない。しかし、その一方で、全面的な触る展示の実現は、人類学博物館が「触る」という手法をより洗練されたものとしていく大きな責任を負ったことを意味している。

「触る」と言う行為が博物館における学びの入り口として、そして方法として、どれだけの意味づけができるのか、が問われている。

2018年1月
南山大学人類学博物館

目 次

卷頭言

故・番澤勉氏収集の考古資料（1）——土器・土製品——

..... 黒澤 浩・如法寺慶大… 1

縄紋時代後期加曾利 B 式土器の研究（Ⅱ）——加曾利 B2 式の理解のために——

..... 大塚達朗… 31

故・番澤勉氏収集の考古資料 (1)

——土器・土製品——

黒澤 浩・如法寺慶大

はじめに

ここに紹介する資料は、故・番澤勉氏によって収集されたものである。その資料は全て、番澤氏の故郷である青森県を中心とした東北地方北部の考古資料である。資料総数は885点にもおよび、その内訳は石器596点、土器・土製品276点、骨角器4点、石9点となっている。

今回は、その中で土器・土製品について実測図・拓本・写真をもって報告する。石器・骨角器については点数が多いこともあり、未だ整理ができていない。これらについては将来を期することとしたい。

1. 資料受入れの経緯

番澤勉氏は青森県出身で、東海銀行に勤務されていたが、2014年の7月に永眠された。番澤氏は子供の頃から考古学に興味を持って土器や石器を収集されていたようで、先述のようにその点数は800点を超えるまでになっていた。

この番澤氏収集の考古資料（以下、番澤コレクションとする）を南山大学人類学博物館にご寄贈いただける仲介の労をとられたのは加藤新一郎氏であった。加藤氏は当館の主催する行事に参加されるなど、当館の良き理解者であり、後援者である。その加藤氏が番澤氏のご葬儀の席でご遺族より相談され、当館をコレクションの寄贈先としてご紹介いただいたのである。

そして、2014年中に、ご遺族からの人類学博物館へのご寄贈が実現した次第である。

2. 資料について

番澤コレクションはそのほとんどが東北地方北部の縄文時代資料であり、特に早期の貝殻文系土器と前期の円筒下層式土器、中期の円筒上層式土器については

完形土器も含め、非常にまとまった資料群であると言える。完形に復原された円筒下層式、円筒上層式の2個体は番澤氏のお父上の採集であるという。

採集地については正確なところは現在調査中であるが、早期の土器には「沢里」という地名が付されており、また加藤氏経由によるご遺族からの情報では風張遺跡・是川遺跡で採集されたものが含まれているようである。風張遺跡・是川遺跡はすでによく知られた遺跡であるが、沢里という地名については既知の遺跡としては知られておらず、現在確認をしているところである。

今回の報告にあたっては、拓本・実測図および写真を掲載している。ただし、数点の土器については拓本と写真とで天地が逆転しているものがある。これは写真撮影のタイミングが図化作業よりも早かったため、撮影後の図化作業の中で土器片の上下を再度精査した結果、撮影時の土器の向きを修正したことによる。したがって、拓本のほうが精度は高いと言えるが、小破片も多く、土器片の方向の判定に不確実な部分を残している。

また、拓本・実測図のレイアウトと写真図版のレイアウトは、一部を除き、一致させている。

3. 資料の記載

(1) 分類

土器についての記述と、拓本・実測図と写真の照合の便を図るため、資料群を時期および型式によって以下のように分類しておく。

第1群土器…縄文早期の貝殻文系土器。ほぼすべて寺の沢式土器の範疇で捉えられる。

第2群土器…縄文前期の円筒下層式土器である。完形に復原された個体を1点含む。

第3群土器…縄文中期前半の円筒上層式土器である。完形に復原された個体を1点含む。

第4群土器…縄文後期の土器を一括する。その内訳には後期初頭の土器、蛭沢式土器、後期前半の粗製土器を含んでいる。

第5群土器…縄文晩期の亀ヶ岡式の一群である。土器としては大洞BC式・C1式があり、遮光器土偶を2点含む。

第6群土器…古墳時代以降に属すると思われるものである。

(2) 第1群土器 (第1図～第4図、写真図版1～11)

第1図1～6、8～19は口縁部片である。基本的には平縁であり、口縁端部に貝殻腹縁による刻目を施すものが多い。19はヘラ状工具による刻目を施した事例であり、型式が異なるかもしれない。

第1図7・10・12・15は口縁部直下の文様帯の一部が見える。第2図20～30、32～34は同文様帯を残した個体である。多くの場合、貝殻腹縁文の上に細い沈線文を数条、もしくは水平方向の貝殻腹縁文を施した簡素なものであるが、20はやや幅広く列点文帯を形成している。

第1図36～47、第2図、第3図102～121は胴部破片を中心としたもので、単斜方向の貝殻腹縁文が施されている。

第3図122～124は貝殻腹縁文をもつ胴部破片であるが、装飾的に施されたものである。123は縦に矢羽状に施している。

第3図125～131は条痕文となっている一群である。125はおそらく口縁部下の文様帯で、列点文を施している。

第3図132～142は無文の一群である。132・133は口縁部破片。

第4図143～147は底部もしくは底部付近である。いずれも尖底となる。146は条痕文を施すが、それ以外は貝殻腹縁文を施している。

第4図148～176に掲載した土器は写真図版にはしていない。148・149は口縁部破片で貝殻を用いて縦長に刻目を施している。また176は2条の沈線が入るものの、貝殻腹縁文は施されていない。あるいは別型式かもしれない。

以上が第1群土器の概要である。これらの土器の多くは、胎土に繊維を含んでいるが、焼成は非常に良く、また貝殻腹縁文の施文後に器面を研磨するなど、土器としての仕上がりは良い。

第1群土器は名久井文明氏による寺の沢式と内容がほぼ同じである(名久井1974)。名久井氏は後に「寺

の沢式」という型式名を撤回して、「寺の沢例」としているが、ここでは「時間的に限定される可能性が高い」という領塚正浩氏の指摘に従い(領塚1996)、「寺の沢式」を採用しておく。

(3) 第2群土器 (第5図、写真図版12～17)

第2群土器は円筒下層式土器である。第5図177は略完形に復原された土器で、番澤氏のお父上の採集品である。口縁部文様帯は下端に押捺ある隆帯を貼付して区画し、鋸歯状文を施している。胴部の縄文は、単軸絡条体第1類の右巻きにした原体を縦方向に回転させている。円筒下層d式であろう。

178は口縁部に左巻きの縄を使った単軸絡条体を横方向に回転させた文様を施している。その直下には結節文を数条施し、胴部の文様は多軸絡条体を縦方向に回転させている。円筒下層b式もしくはc式に属するものであろう。

179はやはり口縁部に単軸絡条体を横方向に回転させた文様を施している。胴部は結束した羽状縄文が施されているが、結節文が見えるのは上の2段のみである。円筒下層c式ないしd式とみられる。

180はやはり結束した羽状縄文を持つ事例である。179と同じ型式と思われる。

181は177と同じく口縁部に鋸歯文を施すが、肥厚させている点と肥厚部分直下に透かし孔をもつ点で異なる。182は波状口縁になる事例で、あるいは円筒上層式かもしれない。

183は縦方向の羽状縄文を施している。円筒下層a～c式に属するものであろう(註1)。

(3) 第3群土器(第6図187・188、写真図版16・18)

第3群土器は円筒上層式土器である。第6図187は略完形に復原されている。やはり番澤氏のお父上の採集品である。口縁部に隆帯と単軸絡条体による文様帯を持ち、胴部には単節LRを横回転で施している。縄文は2帯ずつ施され、結節文で区画して結節文間に狭い無文部分をもっている。円筒上層a式であろう。188も同型式のものと思われる。

(4) 第4群土器 (第6図189～191、写真図版19～21)

後期の土器を一括して第4群としている。189は沈線により横長の楕円形文様を数段重ねている。後期初頭の土器である(註2)。190は隆帯を縦横で交差させ、その区画の中に沈線で文様を描いている。後期前半の

蛭沢式とされる（註3）。191は後期前半に属する粗製土器である（註4）。

(5) 第5群土器（第6図192～195、第7図196～203、写真図版22～30）

いわゆる亀ヶ岡式土器である。192は大洞C1式の浅鉢、193は大洞BC式の注口土器の口縁部であろう。194・195は遮光器土偶で、大洞BC式に属する。

196～200は深鉢の底部、201・202は台付浅鉢の脚部である。203はおそらく舟形土器になるであろう。脚と思われる円形の小突起があるが、おそらく4個付くものと思われる。

(6) 第6群土器（第7図204・205、写真図版31・32）

古墳時代以降と考えられる土器である。204は頸部に段をもち、その上部を赤彩している。胴部破片は同一個体と判断して復原しているが、赤色顔料により縦横が交差する格子目を描いている。古墳時代前期のものと考えられる。

205は古墳時代後期もしくは古代の甕の底部である。内面にはハケメをほどこしており、底部に接する胴部最下端は据え置いた状況を思わせる磨滅痕が見られる。

おわりに

以上が故・番澤勉氏が収集された資料について報告である。冒頭でも述べたように、資料総数は800点

にものぼり、特に石器については未だ整理の途上である。今後整理作業を進め、できるだけ早い時期にご遺族に報告したいと考えている。

なお、本報告をまとめるにあたっては領塚正浩氏（市川考古博物館）と市川建夫氏（八戸市埋葬文化財センター是川縄文館）に多大なるご教示をいただいた。感謝いたします。

註

- 1：青森県是川縄文館の市川建夫氏のご教示による。
- 2：註1に同じ。
- 3：註1に同じ。
- 4：註1に同じ。

文献

- 小笠原雅行 2008「円筒上層式土器」『総覧縄文土器』、344-351頁、『総覧縄文土器』刊行委員会
- 茅野嘉雄 2008「円筒下層式土器」『総覧縄文土器』、218-225頁、『総覧縄文土器』刊行委員会
- 名久井文明 1974「北日本縄文式早期編年に関する一試考——青森県三戸町寺の沢遺跡出土遺物について——」『考古学雑誌』第60巻第3号、1-26頁、日本考古学会
- 山内清男 1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
- 領塚正浩 1996「東北地方北部に於ける縄文時代早期前半の土器編年（上）」『史館』第27号、1-31頁、史館同人
- 領塚正浩 2008「貝殻・沈線文系土器」『総覧縄文土器』、94-103頁、『総覧縄文土器』刊行委員会

図版 番号	図 番号	注記番号 (Bzt)	写真図 版番号	名称	時期	型式	部位	地名	繊維	胎土	色調	備考
第1図	1	474	写真図版1	土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里		砂粒・雲母	黒褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	2	533		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里	有	細砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	3	439		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里		細砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	4	480		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里	有?	細砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	5	475		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里		細砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	6	478		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里		細砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	7	535		土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里	有	砂粒・雲母・赤色粒	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	8	471		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里	有	細砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	9	477		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里		細砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	10	438		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里		細砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	11	472		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里		砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	12	525		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里		砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	13	443		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里		砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	14	520		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	15	479		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里		細砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	16	524		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里		細砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	17	481		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	18	521		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	19	470		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	20	469	土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里	有	細砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	21	483	土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里	有	砂粒・雲母	暗灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	22	502	土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里		砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	23	497	土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里		砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	24	494	土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	25	498	土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里	有	砂粒・雲母	明灰褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	26	526	土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里	有	細砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
			写真図版2									

表1 土器・土器製品一覧表

図版 番号	図 番号	注記番号 (Bzt)	写真図 版番号	名称	時期	型式	部位	地名	繊維	胎土	色調	備考
第1図	27	468	写真図版2	土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	28	511		土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	29	488		土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里	有	細砂粒・雲母	暗褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	30	503		土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里		砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	31	484		土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里		砂粒・雲母	黒褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	32	482		土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里	有	砂粒・雲母	黒褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	33	493		土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	34	532		土器	早期	寺の沢式	口縁部直下	沢里		細砂粒	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	35	505		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	細砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	36	440		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	赤褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	37	444	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	赤褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	38	447	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	39	450	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	40	441	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	赤褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	41	445	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	42	448	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	43	451	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	44	442	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	45	446	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	46	449	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
47	452	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
第2図	48	453	写真図版4	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		細砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	49	457		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	50	461		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	51	465		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	52	454		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	赤褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」

表2 土器・土器製品一覧表

図版 番号	図 番号	注記番号 (Bzt)	写真図 版番号	名称	時期	型式	部位	地名	繊維	胎土	色調	備考
第2図	53	458	写真図版4	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	54	462		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	55	466		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	細砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	56	455		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	暗灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	57	459		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	暗灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	58	456		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	59	460		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	60	463		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	黒褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	61	467		土器	早期	寺の沢式	口縁部下	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	62	486		土器	早期	寺の沢式	口縁部下	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	63	489	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母・赤色粒	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	64	492	土器	早期	寺の沢式	口縁部下	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	65	501	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	細砂粒・雲母	灰褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	66	508	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	67	487	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	68	490	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		細砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	69	495	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	70	504	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	灰褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	71	510	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	赤褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	72	491	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	黒褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	73	500	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	74	499	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母・赤色粒	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	75	506	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	細砂粒・雲母	明灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	76	507	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	暗灰褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	77	512	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	暗灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	78	513	写真図版6	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」

表3 土器・土器製品一覧表

図版 番号	図 番号	注記番号 (Bzt)	写真図 版番号	名称	時期	型式	部位	地名	繊維	胎土	色調	備考
第2図	79	517	写真図版6	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	80	543		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	81	545		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母・赤色粒	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	82	554		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		細砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	83	559		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	84	514		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	85	518		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明赤褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	86	546		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母・赤色粒	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	87	548		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		細砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	88	555		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	細砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	89	560		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	細砂粒・雲母	暗褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	90	515		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	91	519		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	92	549		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	細砂粒・雲母	赤褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	93	550		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	暗褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	94	556		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	95	561		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母・赤色粒	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	96	516		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	明灰褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	97	547		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母・赤色粒	暗褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	98	551		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母・赤色粒	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
99	553	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
100	557	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
101	562	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
第3図	102	564	写真図版7	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	細砂粒・雲母・赤色粒	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	103	570		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母・赤色粒	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	104	608		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」

表4 土器・土器製品一覧表

図版 番号	図 番号	注記番号 (Bzt)	写真図 版番号	名称	時期	型式	部位	地名	繊維	胎土	色調	備考	
第3図	105	616	写真図版7	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	106	627		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	107	565		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	108	571		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	細砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	109	610		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	110	620		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母・赤色粒	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	111	628		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	112	566		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	113	572		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		細砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	114	611		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	赤褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	115	624		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	116	630		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	117	568		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		細砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	118	604		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	119	613		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」	
	120	626	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
	121	631	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
	122	464	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
	123	558	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
	124	567	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母・赤色粒	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
	125	496	土器	早期	寺の沢式	口縁部下	沢里	有	砂粒・雲母	灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
	126	606	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	細砂粒・雲母・赤色粒	灰褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
	127	534	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	細砂粒・雲母	灰褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
	128	485	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
	129	623	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
	130	612	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
				写真図版8									
				写真図版9									

表5 土器・土器製品一覧表

図版 番号	図 番号	注記番号 (Bzt)	写真図 版番号	名称	時期	型式	部位	地名	繊維	胎土	色調	備考
第3図	131	618	写真 図版9	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・ 雲母	明褐色 (外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	132	473		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里	有	砂粒・ 雲母	暗灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	133	522		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里	有	細砂粒・ 雲母	黒褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	134	629		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・ 雲母	明褐色 (外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	135	574		土器	早期	寺の沢式	胴下半	沢里	有	細砂粒	黒灰色 (外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	136	632		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・ 雲母	明灰褐色 (外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	137	619		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・ 雲母	明灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	138	563		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・ 雲母	黒褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	139	625		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・ 雲母	明灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	140	617		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母・ 赤色粒	明褐色 (外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	141	621		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒	赤褐色 (外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	142	605		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母・ 赤色粒	明褐色 (外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
第4図	143	814	写真 図版11	土器	早期	寺の沢式	底部付近		有	砂粒・ 雲母	明褐色 (外)	
	144	815		土器	早期	寺の沢式	底部付近		有	砂粒・雲母・ 白色粒	明褐色 (外)	
	145	805		土器	早期	寺の沢式	底部		有	砂粒・雲母・ 白色粒	明褐色 (外)	
	146	870		土器	早期	寺の沢式	底部		有	砂粒・雲 母・石英	明褐色 (外)	
	147	813		土器	早期	寺の沢式	底部付近		有	砂粒・雲母・ 石英	明褐色 (外)	
	148	476		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里		砂粒・ 雲母	赤褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	149	523		土器	早期	寺の沢式	口縁部	沢里		細砂粒	明褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	150	552		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母・ 赤色粒	赤褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	151	541		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・ 雲母	明褐色 (外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	152	542		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・ 雲母	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	153	615		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母・ 赤色粒・ 白色粒	暗褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	154	544		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母・ 赤色粒	灰褐色 (外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	155	614		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		細砂粒・ 雲母	明褐色 (外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」

表6 土器・土器製品一覧表

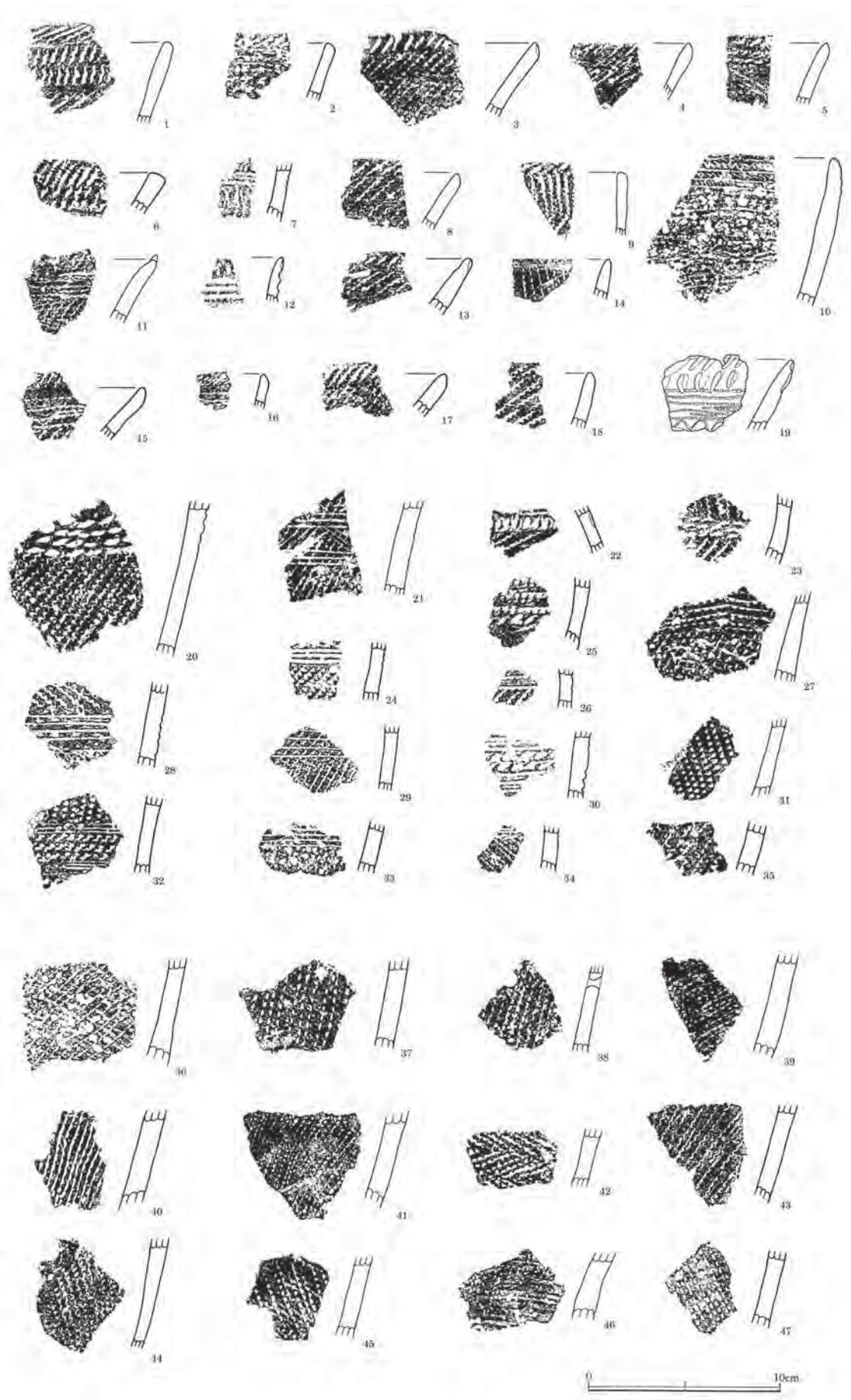
図版 番号	図 番号	注記番号 (Bzt)	写真図 版番号	名称	時期	型式	部位	地名	繊維	胎土	色調	備考
第4図	156	531	写真不掲載	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	157	537		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	158	530		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	159	528		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	160	527		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	161	536		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	162	529		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	細砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	163	539		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	黒色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	164	540		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	赤褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	165	538		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	細砂粒	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	166	609		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	167	509		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	暗褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	168	593		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母・白色粒	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	169	592		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		細砂粒・雲母	灰褐色	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	170	594		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		細砂粒・雲母・白色粒	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	171	607		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		細砂粒・雲母・赤色粒	灰褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
	172	595		土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		細砂粒・雲母・赤色粒	灰褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」
173	591	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母・白色粒	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
174	622	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母	赤褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
175	573	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里	有	砂粒・雲母・白色粒	赤褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
176	569	土器	早期	寺の沢式	胴部	沢里		砂粒・雲母	明褐色(外)	箱：「採取日 昭和38年9月15日 昭和38年10月16日也」		
第5図	177		写真図版 12	土器	前期	円筒下層式	完形		不明	細砂粒	灰褐色	胎土中に炭化物が混入。
	178	846・847・862	写真図版 13	土器	前期	円筒下層式	口縁部～胴中位		有?	細砂粒・雲母	暗灰褐色(外)	
	179	849	写真図版 14	土器	前期	円筒下層式	口縁部		有?	細砂粒・雲母	黒褐色	
	180	842	写真図版 15	土器	前期	円筒下層式	口縁部		有	細砂粒・雲母	暗褐色	
	181	873	写真不掲載	土器	前期	円筒下層式	口縁部		有	白色粒	灰褐色	
	182	857	写真図版 16	土器	前期	円筒下層式	口縁部		有	砂粒	赤褐色	

表7 土器・土器製品一覧表

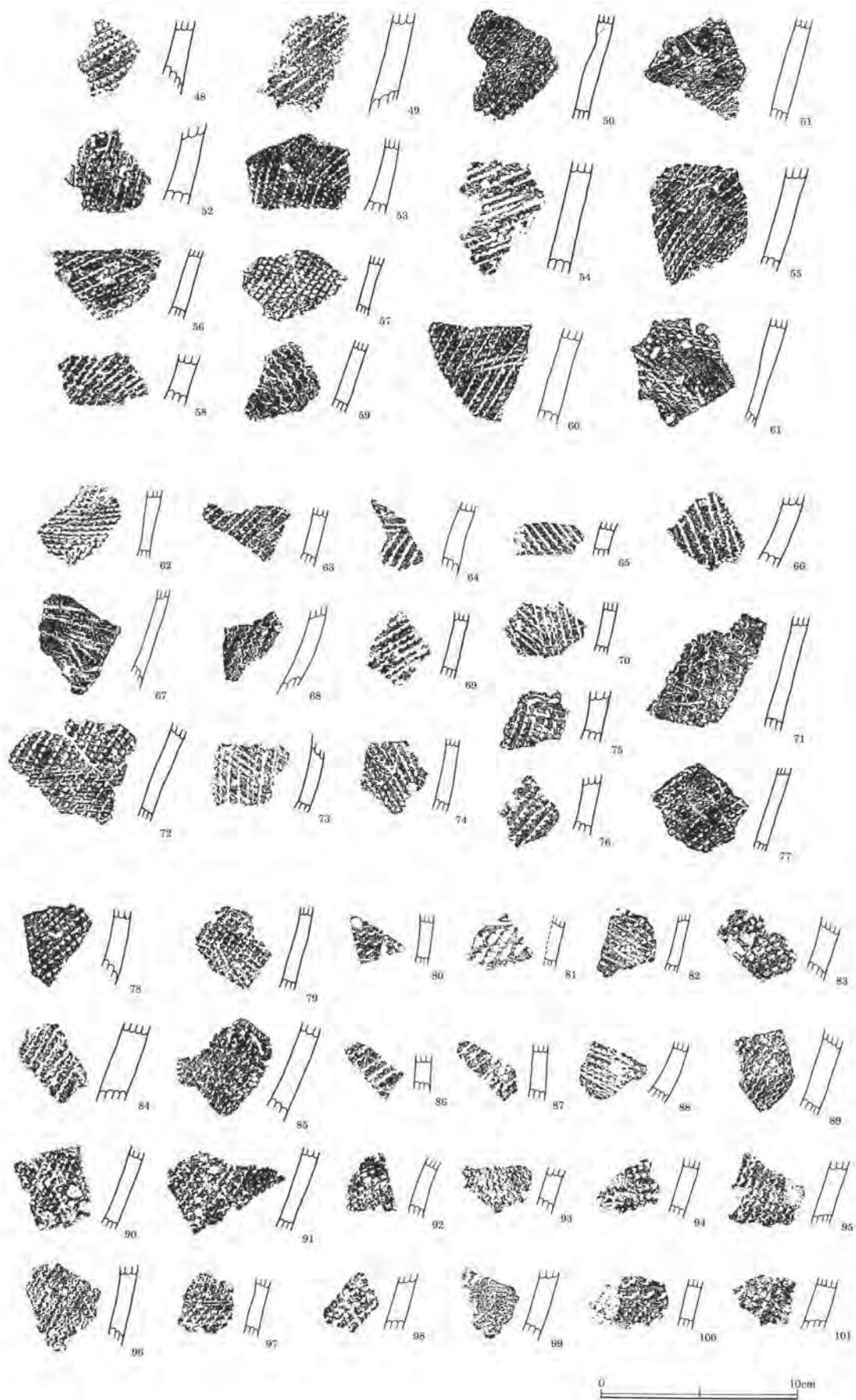
図版 番号	図 番号	注記番号 (Bzt)	写真図 版番号	名称	時期	型式	部位	地名	繊維	胎土	色調	備考
第5図	183	852・ 853	写真 図版 17	土器	前期	円筒下層式	胴部		有?	細砂粒・ 雲母	明褐色 (外)	
	184	854	写真 図版 16	土器	前期	円筒下層式	胴部		有	砂粒・ 雲母	暗赤褐色	
	185	856		土器	前期	円筒下層式	胴部		有	砂粒・ 白色粒	明褐色	
	186	850		土器	前期	円筒下層式	胴部		有	砂粒	暗赤褐色	
第6図	187	187	写真 図版 18	土器	中期	円筒上層式	完形		—	砂粒・赤色 粒・白色粒	暗黄褐色	
	188	861	写真 図版 16	土器	中期	円筒上層式	口縁部		—	細砂粒・ 白色粒	黒褐色 (外)	
	189	844・ 845	写真 図版 19	土器	後期	—	口縁部		—	砂粒	暗赤褐色	
	190	860	写真 図版 20	土器	後期	蛭沢式	胴部		—	砂粒・ 雲母	赤褐色	
	191	851	写真 図版 21	土器	後期	—	口縁部		—	細砂粒・ 雲母	暗灰褐色 (外)	
	192	876	写真 図版 22	土器	晩期	大洞 C1 式	口縁部		—	細砂粒	明褐色 (外)	
	193	826		土器	晩期	大洞 BC 式	口縁部		—	細砂粒・雲 母・白色粒	黒色	
	194	757		土偶	晩期	—	胴～脚部		—	細砂粒・ 白色粒	暗褐色	部分的に赤彩
	195	758		土偶	晩期	—	脚部		—	砂粒・ 雲母	灰褐色	部分的に赤彩
第7図	196	840	写真 図版 23	土器	晩期	—	底部		—	砂粒・ 雲母	暗褐色	
	197	809	写真 図版 24	土器	晩期	—	底部		—	砂粒・ 雲母	灰褐色	
	198	841	写真 図版 25	土器	晩期	—	底部		—	砂粒・雲母・ 白色粒	赤褐色	被熱
	199	858	写真 図版 26	土器	晩期	—	底部		—	白色粒・ 雲母	暗赤褐色	
	200	843	写真 図版 27	土器	晩期	—	底部		—	砂粒・雲母・ 白色粒	灰褐色	
	201	839	写真 図版 28	土器	晩期	—	脚台		—	砂粒・ 白色粒	乳白色 (外)	
	202	848	写真 図版 29	土器	晩期	—	脚台		—	砂粒・ 雲母	暗褐色・ 赤褐色	
	203	855	写真 図版 30	土器	晩期?	—	体部		—	細砂粒	明褐色	裏面に「昭40.6. 市体わきより 出土」と書き込み
	204	801・802・ 803	写真 図版 31	土器	古墳?	—	頸部～胴上半		—	細砂粒・ 白色粒	明褐色	
	205	800	写真 図版 32	土器	古代?	—	底部		—	砂粒・ 雲母	明褐色	

*繊維の項目の空欄は、その個体では確認できないことを示す。「—」の入っているものは、繊維が入っていないことを示す。
*色調は外面で示している。(外) がついていないものは、内外面とも同じ色調であることを示す。

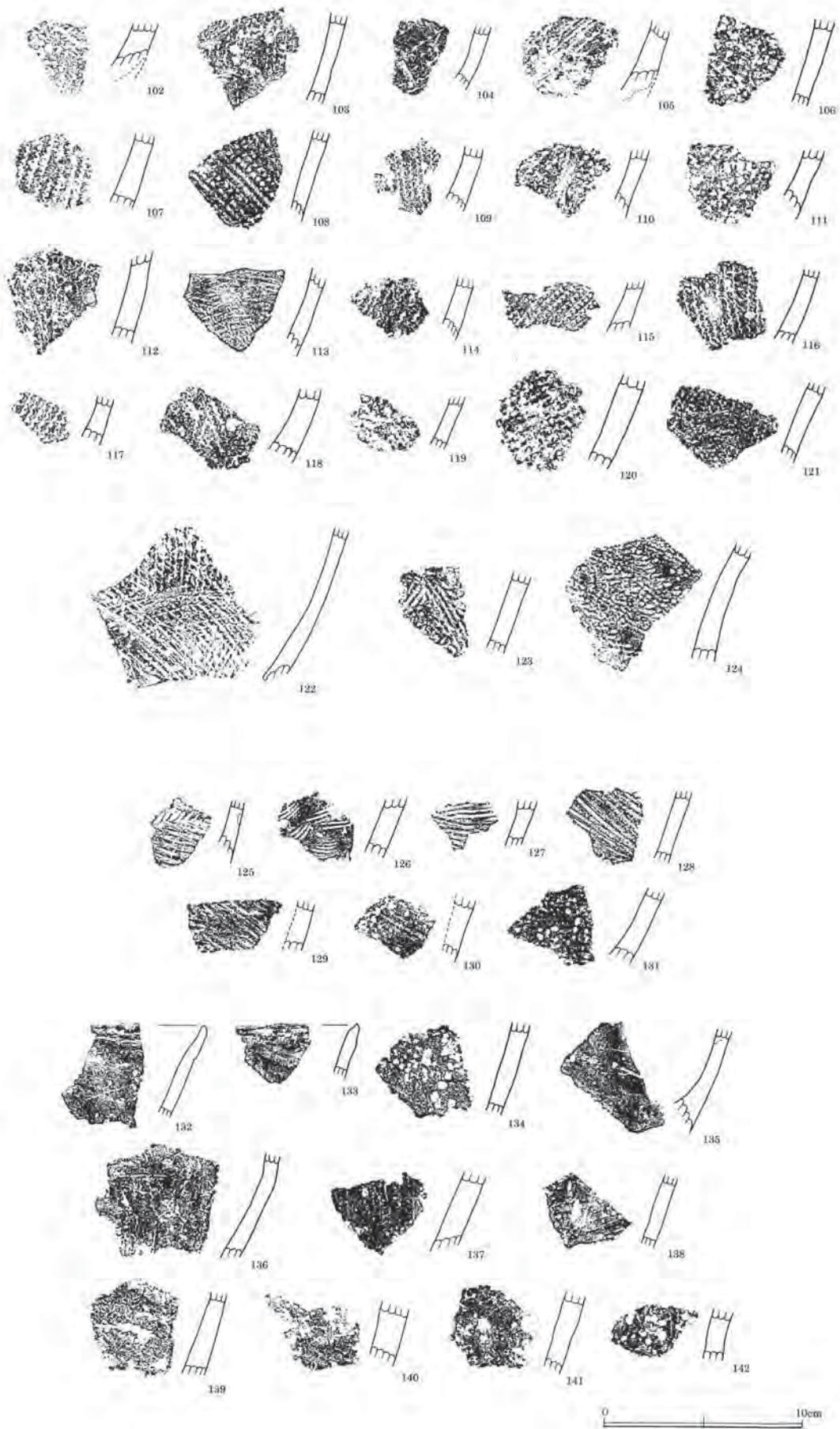
表8 土器・土器製品一覧表



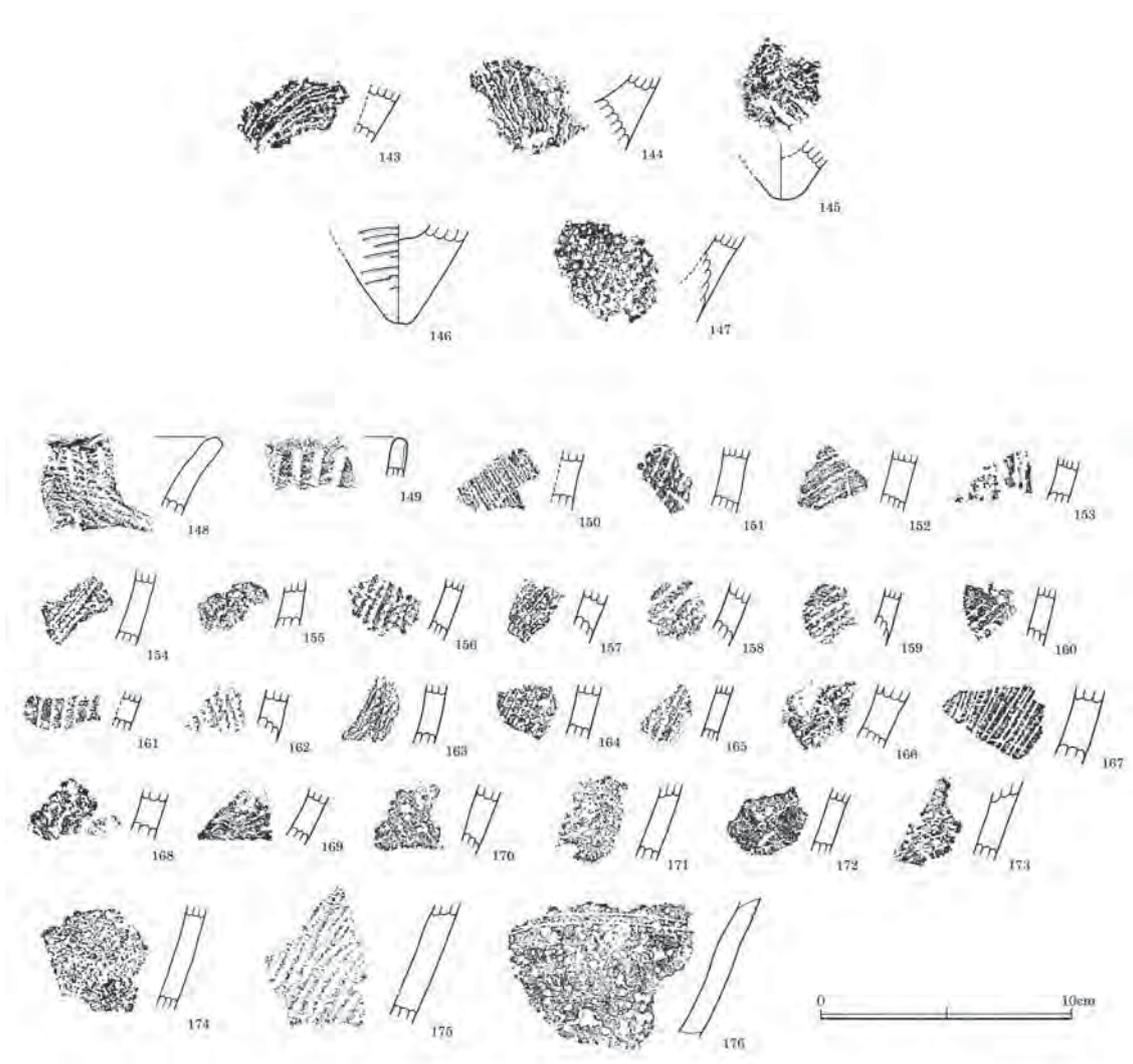
第1図 縄文早期の土器 (1)



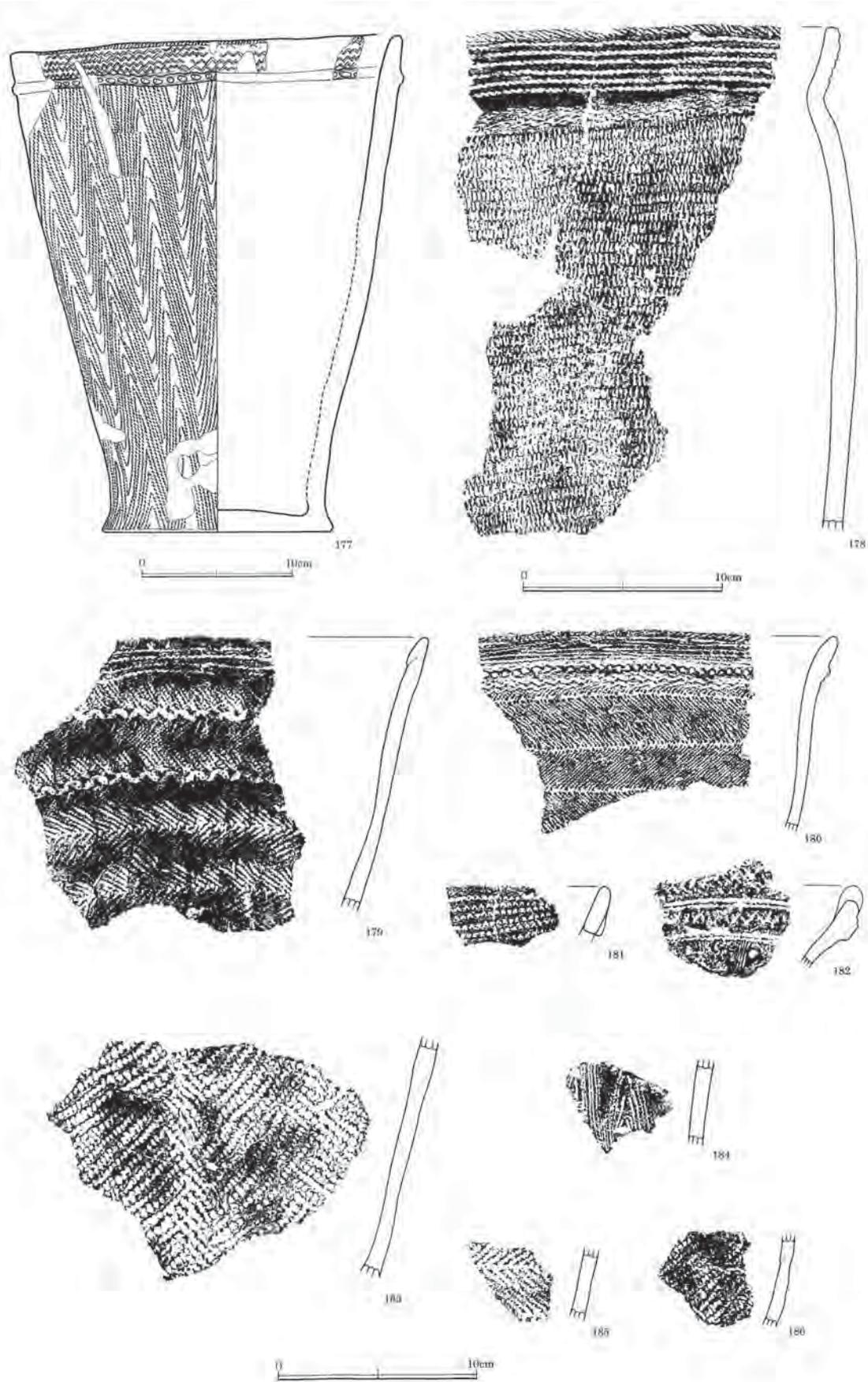
第2図 縄文早期の土器 (2)



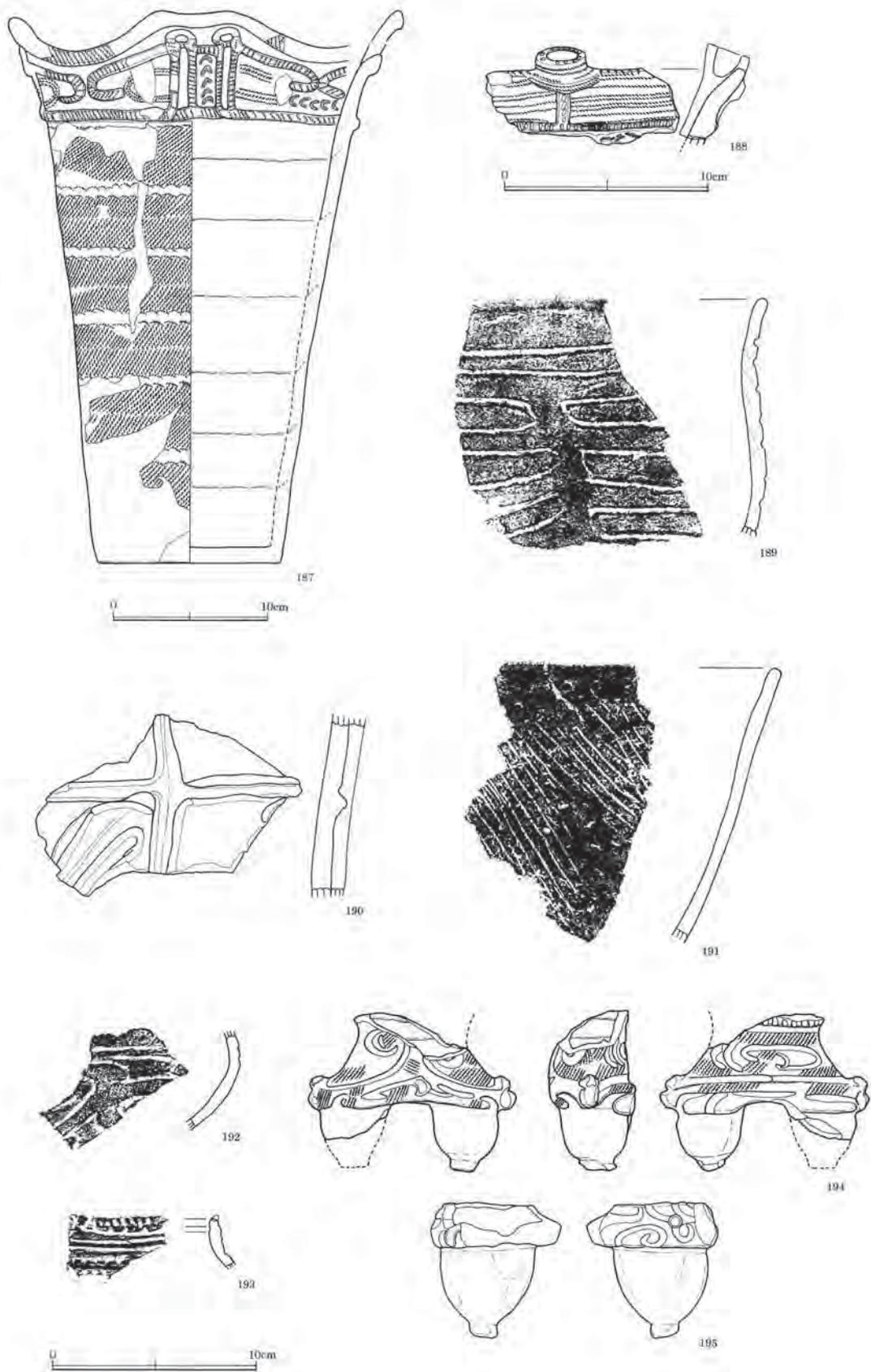
第3図 縄文早期の土器 (3)



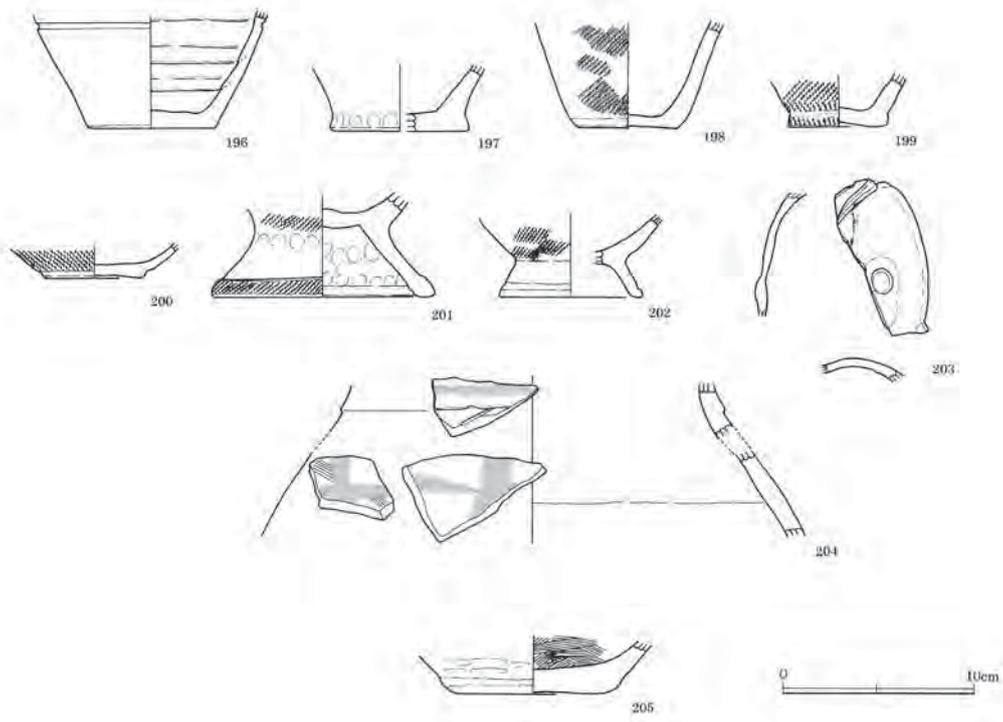
第4図 縄文早期の土器 (4)



第5図 縄文前期の土器

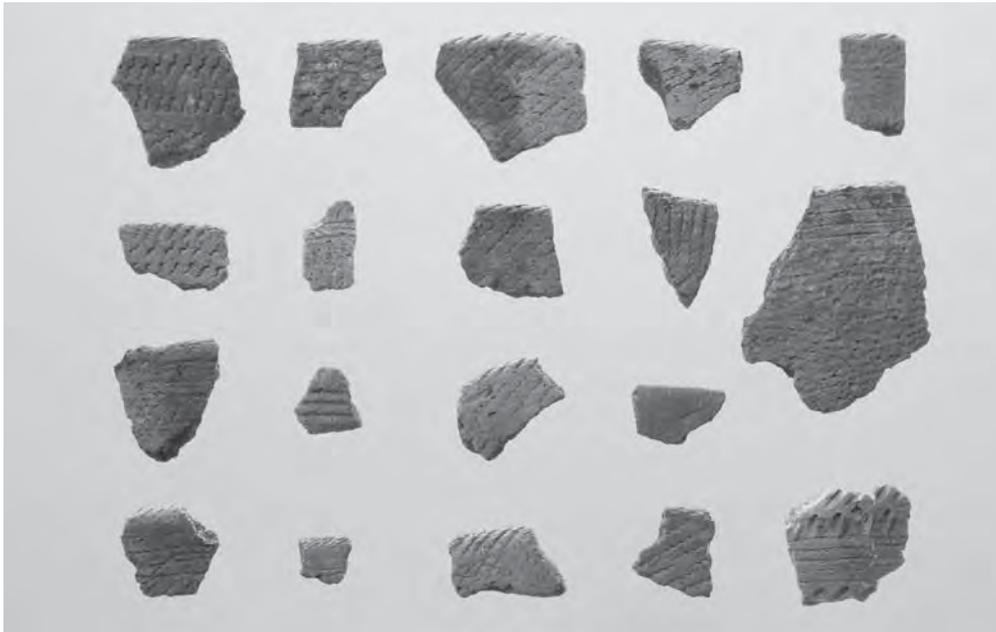


第6図 縄文中・後・晩期の土器・土製品

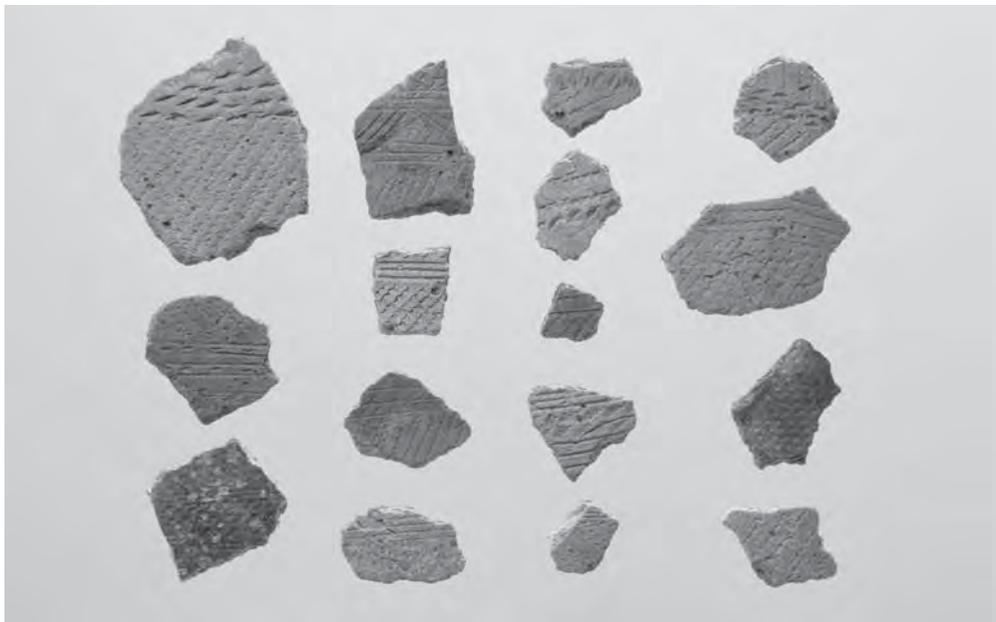


第7図 縄文晩期以降の土器

写真図版 1



写真図版 2



写真図版 3



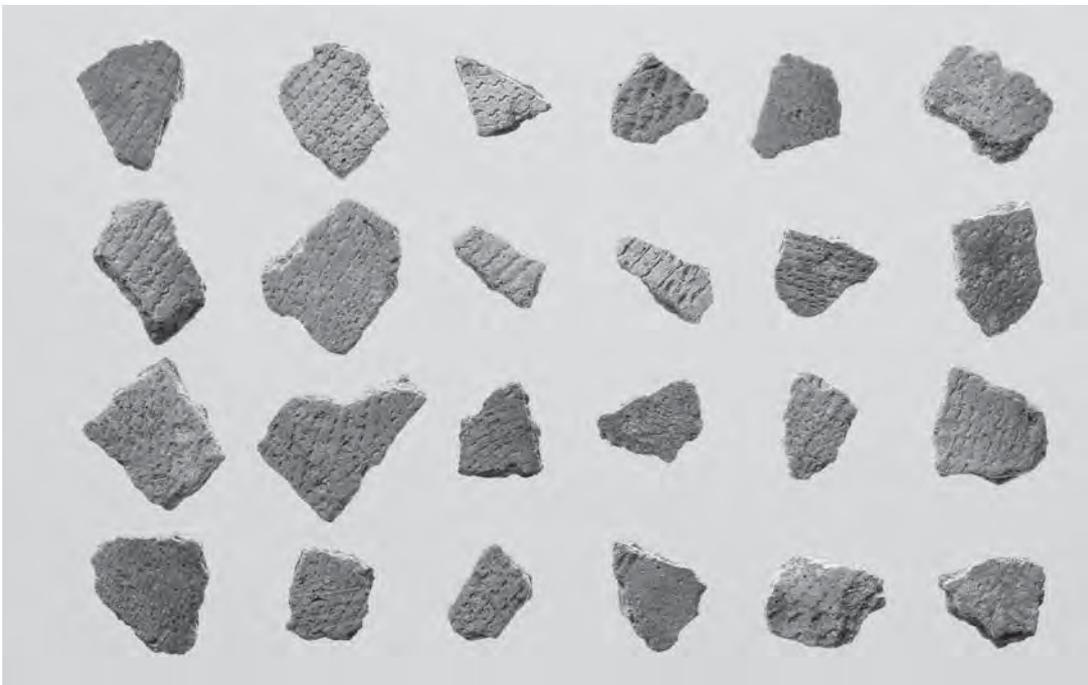
写真図版 4



写真図版 5



写真図版 6



写真図版 7



写真図版 8



写真図版 9



写真図版 10



写真図版 11



写真図版 12



写真図版 13



写真图版 14



写真图版 15



写真图版 16



写真图版 17



写真図版 18



写真図版 19



写真図版 20



写真図版 21



写真図版 22



写真図版 23



写真図版 24



写真図版 25



写真図版 26



写真図版 27



写真図版 28



写真図版 29



写真図版 30



写真図版 31



写真図版 32



Archeological sources collected by the late Mr. BANZAWA Tsutomu (1)
—pottery and clay figures

KUROSAWA Hiroshi
NYOHOJI Keita

This paper reports about archeological collection of the late Mr. BANZAWA Tsutomu, which was donated by his family in 2014. The collection contains more than 800 Jōmon-period materials found mainly in his own birthplace Aomori prefecture. Here we investigated pottery and two clay figures (dogu).

The whole collection can be divided into six categories: shell-impressed pottery (Teranosawa Type pottery) of the Initial Jōmon period, Entō-Joso Type pottery (cylindrical lower pottery) of the Early Jōmon period, Entō-Koso Type pottery (cylindrical upper pottery) of the Middle Jōmon period, a group of pottery of former part of the Late Jōmon period, Kamegaoka Type pottery of the Final Jōmon period, and remains made during the Kofun period or later. Among them, the group of pottery of the Initial Jōmon period especially have almost the same contents of sources found at the type site of Teranosawa Style, and therefore are good sources showing the conditions of the Initial Jōmon period of this area.

縄紋時代後期加曾利 B 式土器の研究 (Ⅱ)

——加曾利 B2 式の理解のために——

大塚達朗

1. はじめに

小論は、南山大学人類学博物館所蔵資料である埼玉県寿能泥炭層遺跡表採土器資料のうちから、加曾利 B2 式体部ソロバン玉状鉢形土器三例 (図 1) を紹介し加曾利 B2 式に関わる考察をおこなうものであるが、小論に至る経緯を説明しておきたい。

寿能泥炭層遺跡の調査は、第 1 次発掘調査が 1979 年 10 月から 1980 年 8 月までおこなわれ、第 2 次発掘調査が 1980 年 9 月から 1981 年 5 月までおこなわれた。報告書刊行のための整理作業は、1981 年 6 月から 1984 年 3 月まで行われ、同年 3 月に報告書が刊行された (埼玉県立博物館 (編) 1984a・b・c)。これから紹介する「つ」の字紋を有する体部ソロバン玉状鉢形土器および他二例 (図 1) の加曾利 B2 式土器は、寿能泥炭層遺跡の第 2 次調査が終了した直後、新屋雅明 (2011 年死去) と筆者が 2 週間ほどかけて当該遺跡の第 2 次発掘調査時に生じた廃土の山から表採したもの的一部である。二人で表採した土器資料は、2016 年に、筆者が南山大学人類学博物館に寄贈した。

表採土器中には、関西方面の土器型式である一乗寺 K 式の口縁部破片が一片あるが、筆者の不注意で表採直後に所在不明となってしまい、表採資料全体の報告は長らく中断したままであった。表採資料を南山大学へ寄贈するために移送した後、念のためにさいたま市の拙宅をくまなく調べたところ、幸いなことに、地下室から当該一乗寺 K 式土器破片を再発見し、しかも、一乗寺 K 式に関する新進気鋭の研究者小泉翔太 (弘前大学) と胎土分析に優秀な研究業績を積み重ねている建石徹 (文化庁) によって型式出自や胎土にかかわる研究成果が、今後報じられることとなった。

そのような出会いに鑑みて、長らく中断していた寿能泥炭層遺跡の加曾利 B2 式土器の研究を再開して、新視点から加曾利 B2 式体部ソロバン玉状鉢形土器優品論を述べることにする。また、寿能泥炭層遺跡の加

曾利 B1 式土器に関しては、2004 年に、新視点から論じておいたので (大塚 2004)、併読を希う。

2. 表採された体部ソロバン玉状鉢形土器三例

紹介する体部ソロバン玉状鉢形土器三例 (図 1-1 ~ 3) は、『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編 (遺構・遺物) —』 (以下、『寿能報告書』) に掲載された個体と接合して同一個体となるもの (図 1-1・2) と、『寿能報告書』には掲載されていない個体 (図 1-3) である (1 ~ 3 ともに表採破片が接合する)。紹介の前に、寿能泥炭層遺跡の報告済みの体部ソロバン玉状鉢形土器 (図 2 ~ 図 4) を概観しておきたい。当該土器は、「く」の字状に張り出す部位 (以下、肩部) を持つもので、肩部のところで擬口縁となる。そして、肩部端から内湾する曲面 (凸面) が肩部上半を構成する。肩部上半には弧線紋を連続させたり、入組紋を連続させたりして、肩部下半には斜沈線紋を有する土器を体部ソロバン玉状鉢形土器の典型とみなして、他に、大きさが同様に、肩部上半に「つ」の字紋や長円形紋をめぐるものなど (図 2-1・2、4) を含めている。

口縁部の断面形は、三つある。一つは、肩部上半の曲面が、内湾したまま口縁部になるものである (内湾口縁: 図 1-1、図 2-1 ~ 9、図 3-2、4、7、図 4-1、4、6・7)。詳しくみると、図 2-9 は、口縁端が以下の水平な区画沈線部分よりも薄く、とくに口縁端内面側に注目すると、内湾ではなくわずかだが外に反り気味となるようにみえる。図 4-6 例は、口縁端が以下の水平な区画沈線部分よりも軽く外に反り気味となるようにみえる。同図-4 例は、口縁端内面側が削がれたようで、尖った口縁端となる。大森貝塚 (関 (編) 1980) では、内湾から屈曲がはっきりと変わった口縁部の鉢形土器がある (図 5-8)。二つ目は、肩部上半の曲面の上に短く直立した口縁部がのるようになるものである

(直立口縁：図3-9・10)。大森貝塚では、図5-6、9例の鉢形土器の口縁が直立である。そして三つ目は、外反口縁と呼ぶべきものである。図4-5例は、肩部上半の曲面から方向が変わり、短く外反する口縁を持つもので、他方、同図-8例は、大きく外反する口縁を持つ。当例は、肩部端部の最大径よりも口縁部の方の最大径がやや大きい。図3-5・6例も外反口縁を持つものと思われるが、それ以上のことは分からない。大森貝塚では、図5-10例が該当する。

直立口縁の場合と外反口縁の場合では、肩部上半の曲面との境のところでも擬口縁となり、体部ソロバン玉状鉢形土器は、いわば部分と部分をつなぎ合わせた土器といえよう。

肩部端のところでは2条の沈線区画の中(あるいは1条の沈線区画の下)に刻紋が施されるものが顕著で(図2-1～9、図3-1～4、6・7、9、図4-1、3)、手法Aと呼んだ(大塚1984)。他方、肩部端のところでは沈線区画の中に縄紋が施されるもの(図3-5、8、10、図4-2、4・5、7・8)は、手法Bと呼んだ(大塚1984)。図4-6例は、手法Aでもなく手法Bでもなく、別範疇にしたが(大塚1984)、それにとどまった。ここでは、肩部端付近に水平沈線が1条めぐりだけのものとして、手法Cと呼ぶ。また、大塚(1984)では、肩部端が手法Bで、肩部下に右下がりの斜条線紋を有する体部ソロバン玉状鉢形土器(図3-8、図4-2)を加曾利B3式と決めつけたが、それは誤りで、加曾利B2式であることも論じるが、そろそろ表採例の紹介に移ることにする。

「つ」の字紋施紋例(図1-1) 当例は、第10土器集中区の図2-1の個体と同一個体で、しかも、当例の右側と図2-1の左側とで接合する(図1-1+図2-1)。肩部端は手法Aである。当例によって、縄紋充填部分が「つ」の字紋となり、かつ、それが肩部上面をめぐることがよりはっきりしたといえる。「つ」の字紋施紋の類例を探すと、寿能泥炭層遺跡では、図5-3の深鉢形土器がある。大森貝塚の壺形土器(図5-5)にも「つ」の字紋が配される。「つ」の字紋と「ト」の字紋は、どこを縄紋充填部にするかで入れ替わる紋様と見立てたが(大塚1986)、その見立ての妥当さは、千葉県宮内井戸作遺跡の鉢形土器が証拠になると考える(印旛郡市文化財センター(編)2009、p.145〈第145図-13〉)。「ト」の字紋の類例を探すと、寿能泥炭層遺跡では、図5-2、4の深鉢形土器がある(後者の「ト」の字紋の先端は、開放されている)。宮内井戸作遺跡の大波状口縁深鉢形土器(図5-1)の頸部に

も、「ト」の字紋が施紋される。後論では、宮内井戸作遺跡の大波状口縁深鉢形土器を組上にのせる。

肩部下半例・その1(図1-2) 当例は、第5土器集中区の図3-3と同一個体で、しかも、当例の右側と図3-3の左側とで接合する(図1-2+図3-3)。肩部端は手法Aで(厳密には、肩部端に隆帯が貼り付けられ、その上端に沿って1状の区画線がめぐり、貼付された隆帯の上に刻紋がめぐり)、肩部下半には、肩部端からやや下がったところを水平に区画線が2条めぐり、接合個体である図3-3の方では、その2条の区画線が重なり1条のようにみえる。区画線下には、浅い沈線によって矢羽根状(右下がり/左下がり)の斜沈線紋が配されるが、その範囲で、器面に擦過痕がみられる。矢羽根状の斜沈線紋については、さらに後述する。

肩部下半例・その2(図1-3) 当例は、報告されたの個体と同一個体となるものではない。肩部端は手法Aであるが、厳密には、肩部端に水平にめぐり1条区画線直下に刻紋がめぐりものである。肩部右端手法Aの直ぐ上(肩部上半の最下端)に縄紋(単節LR)がわずかに残る。第10土器集中区の図2-8例の肩部上面の紋様構成(上向きの扁平な弧線紋の上に玉抱き入組紋)と近いかもしれない。肩部下半には間隔をおいた区画線の中に、鋭い沈線で斜沈線紋が3段(右下がり/左下がり/右下がり)配される。斜沈線紋の範囲で、器面に擦過痕がみられる。この斜沈線紋については、さらに後述する。

以上の三例の報告で、寿能泥炭層遺跡の体部ソロバン玉状鉢形土器資料を増やすことができた。発掘年次と土器集中地区を示すと、第2～6、10～15土器集中地区は第1次調査で検出され、第1、7～9、16土器集中地区は第2次調査で検出された。図1-1～3は、第2次調査で出された廃土の山から表採されたのであるから、同図-1が第10土器集中区の土器と接合すること、同図-3が第10土器集中区の個体(図2-8)と紋様構成が似た別個体かもしれないこと、同図-2が第5土器集中区の個体と接合することは、土器集中地区は見かけ上のことかもしれないことになる。とはいえ、肩部上半の紋様、肩部端の手法、口縁部の断面形状などを念頭において、各集中地区出土土器を比較すると、体部ソロバン玉状鉢形土器の細別が確実に見通せるだけでなく、肩部下半の斜沈線紋の様態(個性的で多様である)からは、体部ソロバン玉状鉢形土器が加曾利B2式を定義する精製土器である所以を説明できるのである。つぎに、それらのことを論じたい。

3. 体部ソロバン玉状鉢形土器の細別

図3-5例と図4-8例（および大森貝塚例〔図5-10〕）は加曾利B3式あるいは曾谷式であり、以下の加曾利B2式の細別の議論から除外することを、あらかじめ述べておく。

第10土器集中地区の体部ソロバン玉状鉢形土器（図2-1～8）は、内湾口縁のみで、かつ、肩部端が手法Aで共通する。肩部上半に上向き（上に凸）の弧線紋が連続するものには、弧線紋だけの例（図2-5）、弧線紋間にさらに「ノ」字紋が加わる例（図2-7）、隣り合う弧線紋の開端のところに円い刺突紋が加わる例（図2-3、6）、円い刺突紋の上に小さな「ノ」字紋が加わり、右端には大ぶりの対弧紋がみられる例（図2-2）、上向きで扁平な弧線紋の上に玉抱き入組紋がめぐる例（図2-8）がある。他に、長円形紋の例（図2-4）と、既述した「フ」の字紋例（図2-1〈+図1-1〉）がある。

見方を変えれば、大森貝塚例（図5-6、8・9）にみられるような、隣り合う弧線紋の開端のところに縦沈線紋と円い刺突紋が加わる例は皆無である。縦沈線紋+円い刺突紋例は、関東に広くみられることから、内湾口縁で、かつ、肩部端が手法Aで共通する第10土器集中地区の体部ソロバン玉状鉢形土器（図2-1～8）は、別の有意なまとまりと判断する。

第7土器集中地区の体部ソロバン玉状鉢形土器（図2-9）は、ここに図示していないものを含めて、肩部端はすべて手法Aである。図2-9例は、第10土器集中地区の隣り合う弧線紋の開端のところに円い刺突紋が加わる例（図2-3、6）とよく似ている。

第12土器集中地区の体部ソロバン玉状鉢形土器（図3-1、4・5、7）は、時期が違う図3-5例を除外すると、肩部端はすべて手法Aである。図3-4、7例は、内湾口縁で、図3-1、7例が隣り合う弧線紋の開端のところに円い刺突紋が加わる例で、第10土器集中地区例（図2-3、6）とよく似ている。図3-4例は玉抱きではない入組紋が肩部上半をめぐるので、入組紋がめぐる点では、第10土器集中地区例（図2-8）に近い。

つぎに、肩部端に手法Aおよび手法Bがみられる土器集中地区を点検する。第11土器集中地区の体部ソロバン玉状鉢形土器（図3-2、8、10、図4-1、3・4）をみると、図3-2、図4-1、3例が手法Aで、図3-8、10、図4-4例が手法Bである。図3-2と図4-1は同一個体で、玉抱きの入組紋が肩部上半をめぐり、図4-4例も玉抱きの入組紋が肩部上半をめぐる。図3-10例

には縦沈線紋がみられる。図3-8例の肩部下半には右下がりの条線紋が配される。第5土器集中地区の資料（図3-3〈+図1-2〉、6、9、図4-2）では、図3-3〈+図1-2〉、6、9例が手法Aで、6、9例には隣り合う弧線紋の開端のところに縦沈線紋と円い刺突紋が加わり、しかも、縦沈線紋の上端にも円い刺突紋が加わる。図4-2が手法Bで、しかも、肩部下半には右下がりの条線紋が配され、第11土器集中地区の図3-8例とよく似ている。

第6土器集中地区の図4-5～7例では、5、7例が手法Bで、前者では隣り合う弧線紋の開端のところに縦沈線紋と円い刺突紋が加わり、後者では玉抱きの入組紋が肩部上半をめぐる。他には、手法Cの例（図4-6）があり、隣り合う弧線紋の開端のところに縦沈線紋と円い刺突紋が加わる。

まとめると、第10土器集中地区・第7土器集中地区・第12土器集中地区の体部ソロバン玉状鉢形土器例と、第6土器集中地区の体部ソロバン玉状鉢形土器例を、それぞれ有意なまとまりとみることができると考える。つまり、隣り合う弧線紋の開端のところに縦沈線紋と円い刺突紋が加わる紋様構成を基準にみれば、出現以前段階（第10土器集中地区・第7土器集中地区・第12土器集中地区の体部ソロバン玉状鉢形土器例）と、出現段階（第6土器集中地区の体部ソロバン玉状鉢形土器例）である。

他方、第11土器集中地区・第5土器集中地区の体部ソロバン玉状鉢形土器例は、隣り合う弧線紋の開端のところに縦沈線紋と円い刺突紋が加わる例が出現する中で、二段階（肩部端：手法A→手法B）あるとみるべきと考える。第11土器集中地区・第5土器集中地区の体部ソロバン玉状鉢形土器の前半段階（肩部端：手法A）は、第10土器集中地区・第7土器集中地区・第12土器集中地区の体部ソロバン玉状鉢形土器例の直後と考える。そして、第11土器集中地区・第5土器集中地区の体部ソロバン玉状鉢形土器の後半段階（肩部端：手法B）は、第6土器集中地区の体部ソロバン玉状鉢形土器例並行と考える。

その編年分析を整理すれば、体部ソロバン玉状鉢形土器は三段階に整理できると考える。つまり、古段階（図2-1〈+図1-1〉～9、図3-1、4、7）→中段階（図3-2・3〈+図1-2〉、6、9、図4-1、3）→新段階（図3-8、10、図4-2、4～7）、という三段階である。ちなみに、大森貝塚には、中段階例（図5-6）と新段階例（図5-8・9）があるが、図5-7例の細別段階は分らない。

4. 加曾利 B2 式の優品

1985 年提出・2015 年公表の修士論文（新屋 2015）で、新屋雅明は加曾利 B1 式後半の「中妻タイプ」が半精製土器（広がり限定）であると明言した。それは、「コロンブスの卵」であり、至極妥当と判断した。であれば、新屋が説く加曾利 B2 式の「中妻タイプ」と「平尾タイプ」（三単位突起深鉢形土器）と「遠部タイプ」は、それぞれ別地方でまとまる傾向にあるため、三タイプは半精製土器とみるべきで、加曾利 B2 式の精製土器としては、広域に分布する体部ソロバン玉状鉢形土器に着目するべきと思いついた。しかも、当該土器は、漆塗り土器であるが（紹介例には肩部下半に漆の塗膜が残っている）、そこに注目するのはではなく、当該土器の肩部下半の斜沈線紋の様態に着目することで、優品であることに気づいたのである（註 1）。

優品論のために、つぎの点を指摘しておく。当該土器肩部下半の斜沈線紋の様態は、ジグザグ状斜沈線紋（2 段〈矢羽根状：図 1-2、図 2-5、図 3-6、図 4-1、3、7〉、3 段〈図 1-3、図 2-6、8、図 3-9〉、4 段〈図 2-7、9、図 4-4〉）、右下がり条線紋（図 3-8、図 4-2）、水平条線紋（図 4-6）と整理できるが、ジグザグ状斜沈線紋（古段階→中段階→新段階と続く）の個体別あり方（沈線の浅い深い、沈線の上がり下がり描き方など）は、詳述しないが、実に個性的で多様で、寿能泥炭層遺跡では、新段階に、さらに、描出方法とクセが異なることから別系統と思われる右下がり条線紋例と水平条線紋例が加わる。他方、寿能泥炭層遺跡と同じく低湿地遺跡である千葉県西根遺跡では、第 4 集地点で新段階の体部ソロバン玉状鉢形土器（肩部端：手法 B・手法 C）が多くまとまって検出されたが、右下がり条線紋例と水平条線紋例が大多数で（手法 B では右下がり条線紋の例が多く、手法 C では水平条線紋の例が多い）、ジグザグ状斜沈線紋例は 2 個体にすぎない（千葉県文化財センター（編）2005、p. 174〈第 136 図-455・456〉）。報告書第 136 図-455 例は手法 C で、同図-456 例は手法 A で、手法 A の方は新段階ではないであろう。

すでに、①ジグザグ状斜沈線紋の出現時の“手本”は特定の粗製土器（図 6-6～8〈←加曾利 B1 式：図 6-1～5〉）が提供したと推定した（大塚 1984、2004）。②現物での当該紋様のあり方（“手本”からの“写し”）は、実に個性的で多様であり、しかも、新段階には、新たに別系統の右下がり条線紋や水平

条線紋が登場した。また、③三単位突起深鉢形土器（図 5-2）と大波状口縁深鉢形土器（図 5-1）などで「つ」／「ト」の字紋を担う中で、部分と部分をつなぎ合わせる方式（例、図 2-1〈+図 1-1〉、2、4）が発案されたと推定する。少ない手がかり①②③からではあるが、様々な流儀を持った作り手（集団）が、手本となる最上の土器＝優品として体部ソロバン玉状鉢形土器を觀念して、各地で協同して現物製作を担当し、さらには、担当が替わったなどの推定に至るのである。

要するに、諸方面の協力を得ながら、体部ソロバン玉状鉢形土器が各地で継続して作られる一方で、各地方に独特な土器（半精製土器）が作られたという図式が考えられる故に、体部ソロバン玉状鉢形土器で加曾利 B2 式を定義するのである。なお、大波状口縁深鉢形土器（図 5-1）を念頭におくと、「遠部タイプ」は、体部ソロバン玉状鉢形土器の作り手（集団）の一部が後に作り始めた土器群と私考している。

5. まとめ

加曾利 B2 式は体部ソロバン玉状鉢形土器で定義すべき、というのが小論の結論である。

ところで、年代学的の単位（「地方差、年代差を示す年代学的の単位」〔山内 1932、p. 41〕）の縄紋土器型式は、形式や器種などをあらかじめ統一的に設定しないために問題だという批判をよく聞く。様式論が欠けているという批判もよく聞く。それらを聞くたびに、筆者は本当に魂消る。何故ならば、それらステレオタイプな批判は、縄紋土器型式には“予定表”があって、“予定表”が実施された結果が縄紋土器型式であると言明したに等しく、換言すれば、型式の背後に“予定表”の実施を命じる“超越的な力”を想定してしまうアポリア（難問）に陥っていることに無自覚だからである。失礼ながら、おそらく、当該批判の発話者は、“超越的な力”による目的論的な歴史認識を目指してしまうことが分らないのであろう。しかも、目的論的な歴史認識は科学的な認識ではないという常識がないのであろう。

年代学的の単位とは、「偶発性」を見込んだ概念であり、故に、「ああでもなく、こうでもなく……」という具合に過去をめぐって資料分析できるのである。小論も年代学的の単位から出発したからこそ、加曾利 B2 式を定義する優品をみいだせたのである。

なお、成稿に際して、黒澤浩教授・川添和暁博士・長田友也博士・土居通正博士には感謝を表したい。

註

- (1) 大塚 (1983) は、①「加曾利 B1-2 式」が層位的根拠を欠き、本来は加曾利 B1 式ないしは加曾利 B2 式であること、②三単位突起の深鉢形土器に関する既存案は部分的に修正することで有効になること、③体部ソロバン玉状鉢形土器は、加曾利 B2 式段階から安行 1 式段階まで複雑な変遷を遂げることなどを指摘した。①②③は、新屋の修士論文 (新屋 2015) の前提となった。「ここでは組成論的な立場から B1-2 式の矛盾を指摘しておきたい」という新屋の独自分析でも、「加曾利 B1-2 式」はありえない」となった。同時に、「縄文を多用する一群の土器」である「中妻タイプ」が、「加曾利 B1 式後半」の東部関東の半精製土器であることを、新屋は見ぬいた。筆者の土器インダストリー論 (大塚 1983, pp. 212-218) を批判的に検討し、それが精製土器・半精製土器・粗製土器の様態を検討する方針と判断し、「組成論的な立場」と読み替えて分析して、「加曾利 B1-2 式」を否定した訳で、否定については筆者も賛成である。だが、新屋の指摘を尊重し加曾利 B2 式に敷衍するならば、新屋の組成論には与し難いことを述べることとなる。平たくいえば、精製土器・半精製土器・粗製土器にかかわる存在論を述べるのである。なお、「平尾タイプ」(三単位突起深鉢形土器) の第 1 段階 (『寿能報告書』図 248-1) が体部ソロバン玉状土器古段階に伴うと考える (大塚 1984, 1989)。

引用・参考文献

- 新屋雅明 2015 「加曾利 B 式土器の再検討」『縄文時代後・晩期土器編年の研究—加曾利 B 式～安行式土器群の変遷—』、六一書房、pp. 1-95。
- 印旛郡市文化財センター (編) 2009 『千葉県佐倉市宮内井戸作遺跡 (縄文時代遺物図版編) —ちばりサーチパーク開発事業予定地内埋蔵文化財調査 (8) —』、印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 266、印旛郡市文化財センター。
- 大塚達朗 1983 「縄文時代後期加曾利 B 式土器の研究 (I) —最近の成果の検討と新たなる分析—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』2、pp. 181-227。
- 大塚達朗 1984 「17. 寿能泥炭層出土加曾利 B 式土器の様相」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編 (分析調査・考察・総括) —』、埼玉県立博物館 (編)、埼玉県教育委員会、pp. 821-829。

- 大塚達朗 1986 「型式学的方法—加曾利 B 式土器—磨消縄紋土器群の分析—」『季刊考古学』17、pp. 30-33。
- 大塚達朗 1989 「加曾利 B 式三細別に於ける齟齬の解消—学史的的理解とは何か—」『先史考古学研究』2、pp. 119-145。
- 大塚達朗 2000 『縄紋土器研究の新展開』、同成社。
- 大塚達朗 2004 「「の」の字単位紋考—加曾利 B1 式の理解として—」『縄文時代』15、pp. 117-142。
- 大塚達朗 2007 「型式学の射程—縄紋土器型式を例に一」『現代社会の考古学』、現代の考古学 1、岩崎卓也・高橋龍三郎 (編)、朝倉書店、pp. 184-201。
- 大塚達朗 2015 「解題」『縄文時代後・晩期土器編年の研究—加曾利 B 式～安行式土器群の変遷—』、六一書房、pp. 257-268。
- 岡崎文喜・新津 健 (編) 1978 『八祖遺跡』、八祖遺跡調査団。
- 埼玉県立博物館 (編) 1984a 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編 (遺構・遺物) —』、埼玉県教育委員会。
- 埼玉県立博物館 (編) 1984b 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編 (分析調査・考察・総括) —』、埼玉県教育委員会。
- 埼玉県立博物館 (編) 1984c 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編 (写真図版) —』、埼玉県教育委員会。
- 関 俊彦 (編) 1980 『大田区史 (資料編) 考古 II』、東京都大田区。
- 千葉県文化財センター (編) 2005 『印西市西根遺跡—県道舟橋印西線埋蔵文化財調査報告書—』、千葉県文化財センター調査報告 500、千葉県文化財センター。
- 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』1 (3)、pp. 1-19。
- 山内清男 1932 「日本遠古之文化 — 縄紋土器文化の真相」『ドルメン』1 (4)、pp. 40-43。
- 山内清男 1935 「縄紋式文化」『ドルメン』4 (6)、pp. 82-85。
- 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1 (1)、pp. 29-32。
- 山内清男 1939 『日本遠古之文化』、補註付・新版、先史考古学会。
- 山内清男 1964 「縄文式土器・総論」『縄文式土器』、日本原始美術 1、講談社、pp. 148-158。
- 山内清男 1967 『日本先史土器図譜 第一部・関東地方・I～X II 集 (1939～1941)』、再版・合冊、山内清男・先史考古学論文集 6～10、先史考古学会。
- (南山大学人文学部教授)

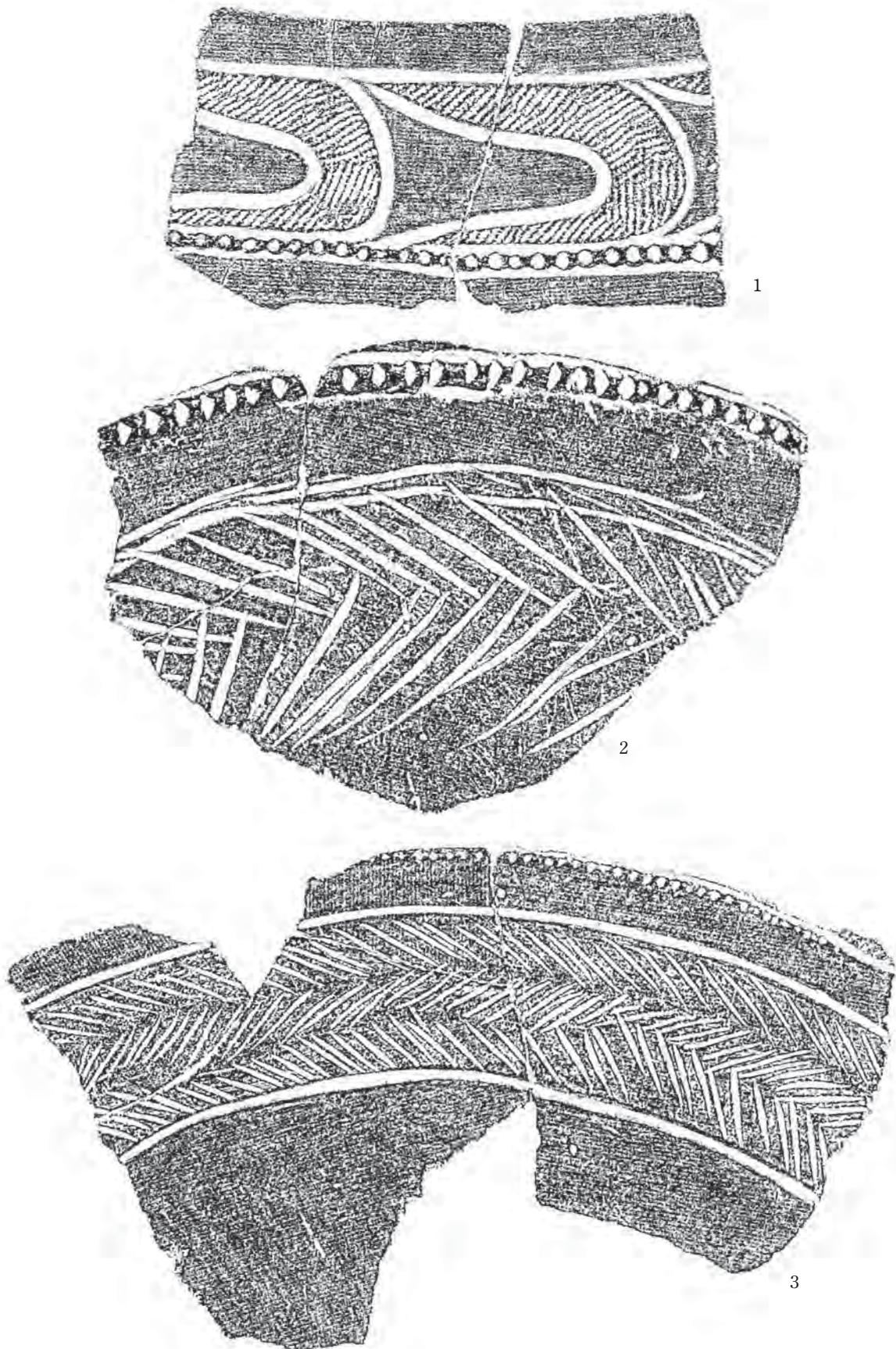


図1 寿能泥炭層遺跡表採体部ソロバン玉状鉢形土器 (s = 2/3)

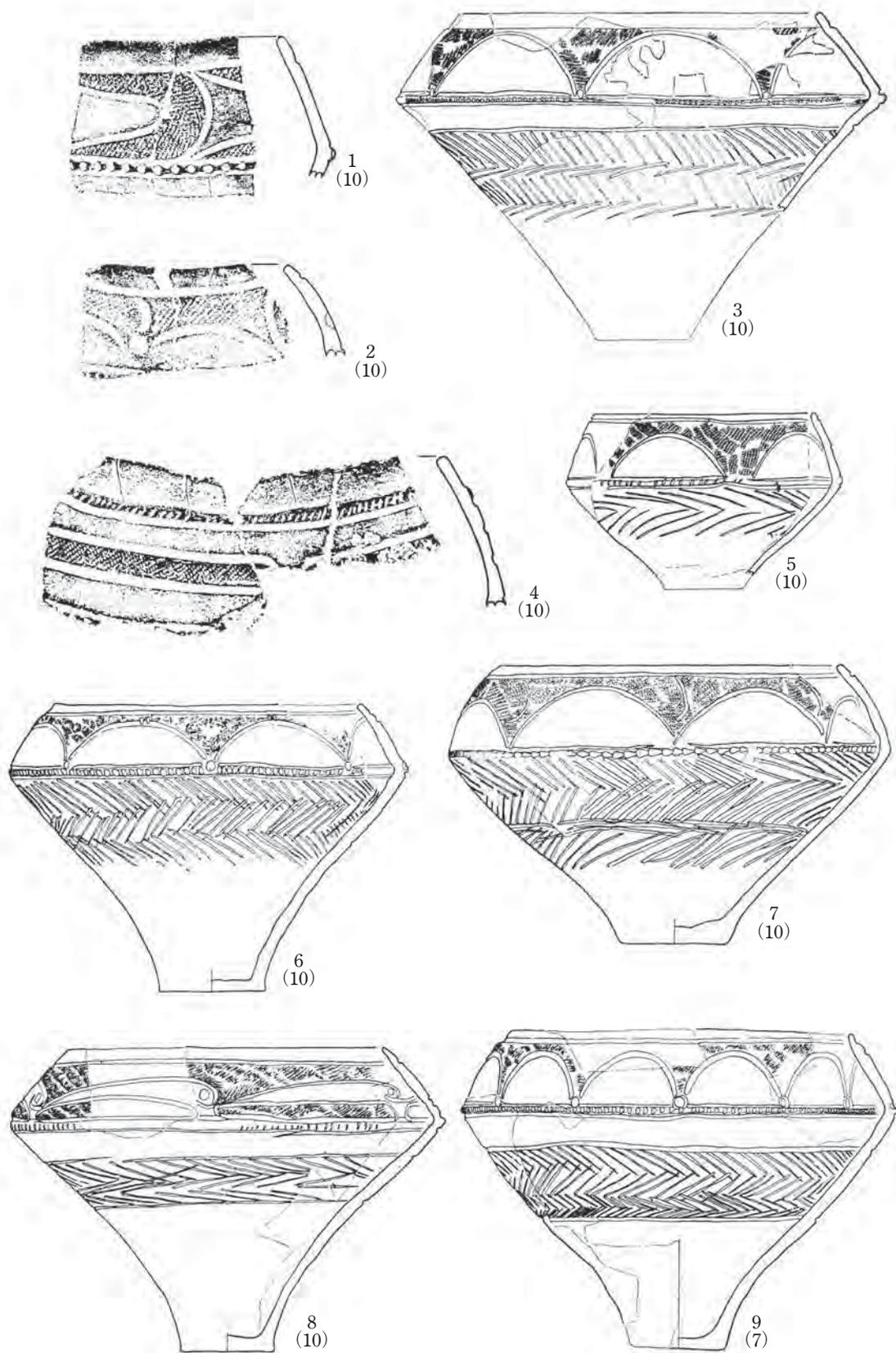


图2 寿能泥炭層遺跡出土土器Ⅰ (1・2、4 : s = 1/3、他 : s = 1/4 <() 内土器集中地区>)

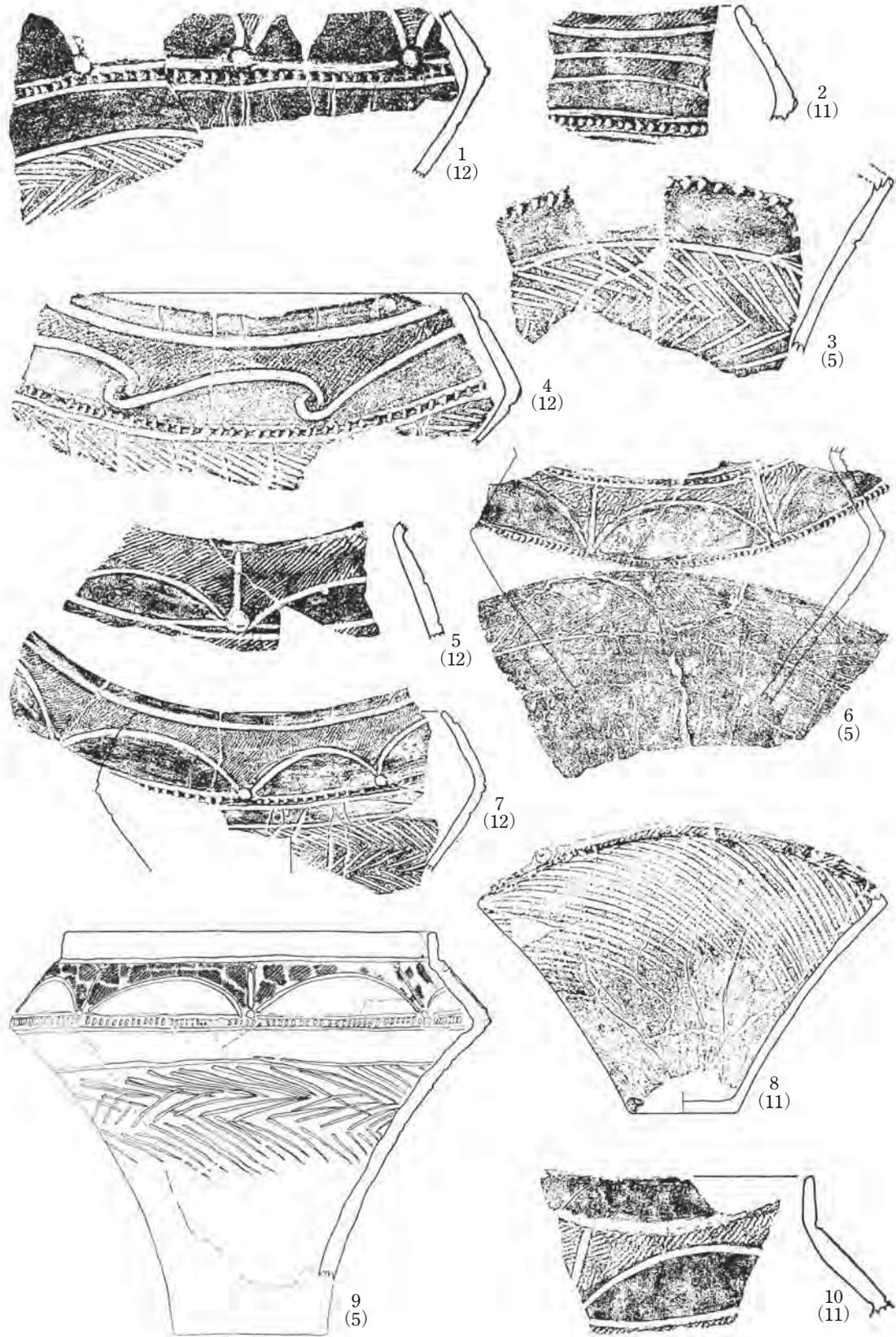


图3 寿能泥炭層遺跡出土土器Ⅱ (1~5、10 : s = 1/3、他 : s = 1/4 <() 内土器集中地区)

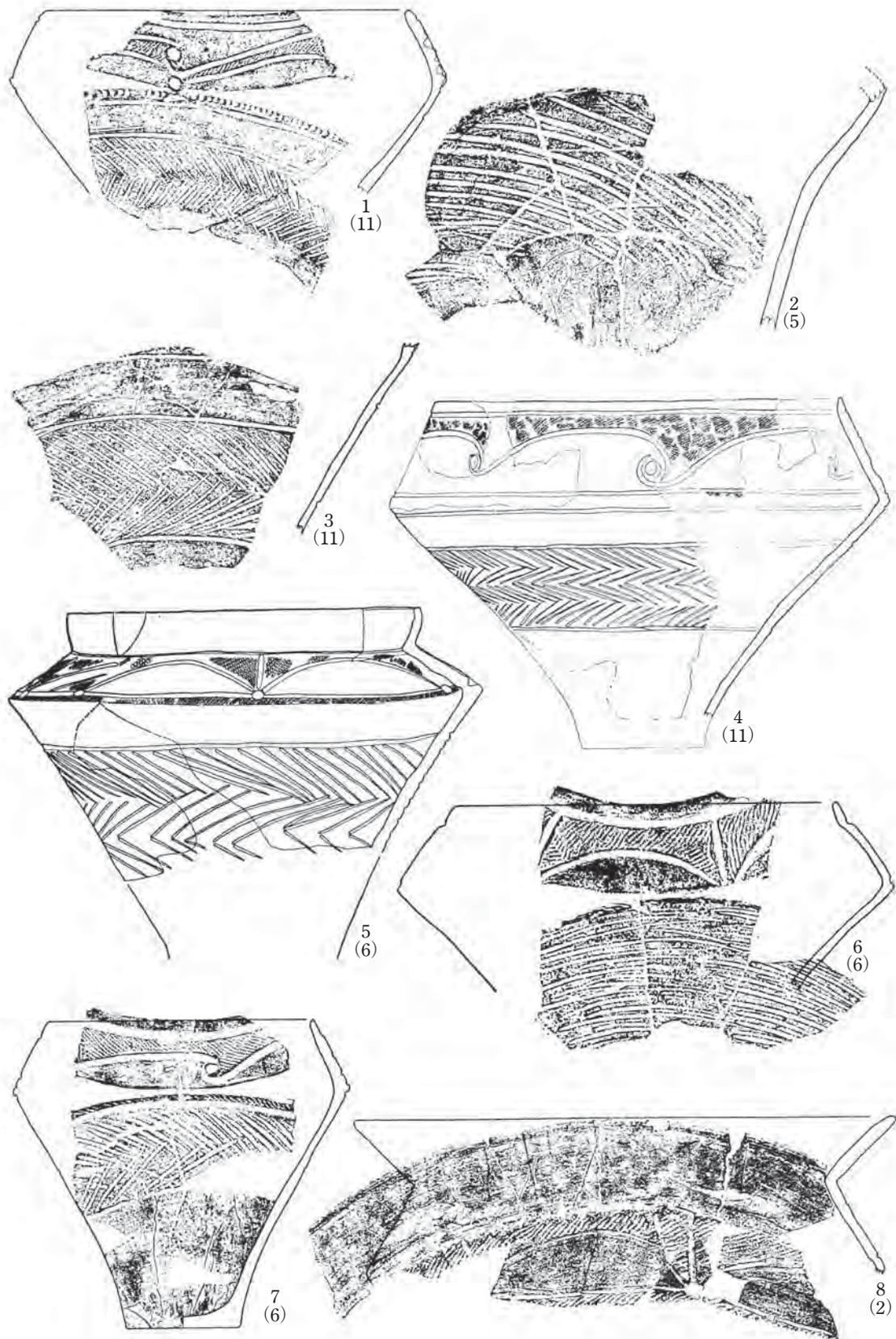


图4 寿能泥炭層遺跡出土土器Ⅲ (2·3 : s = 1/3、他 : s = 1/4 <() 内土器集中地区>)

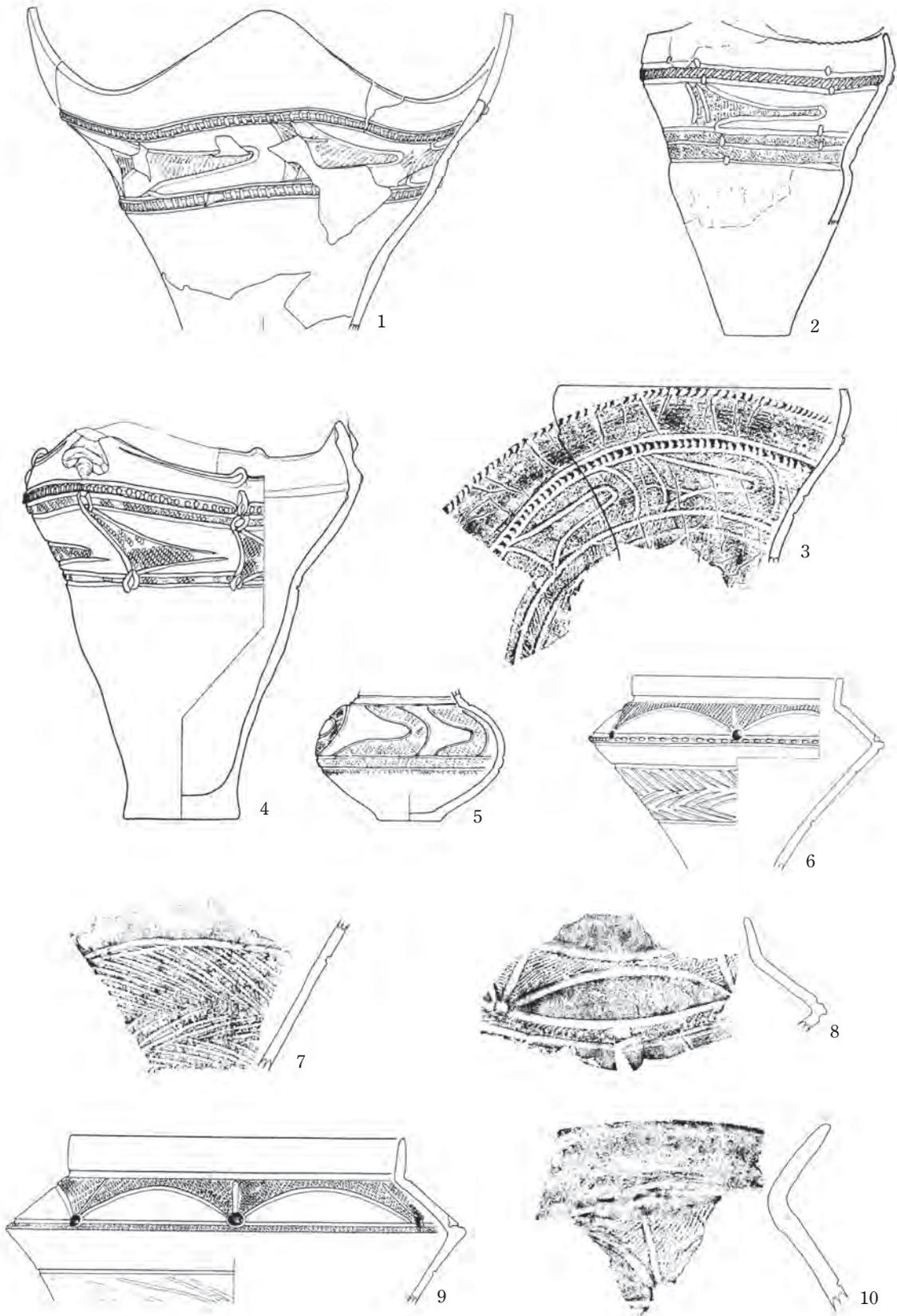


図5 関連資料 (1 宮内井戸作、2~4 寿能泥炭層、5~10 大森貝塚 〈7・8、10 : s = 1/3、他 : s = 1/4〉)

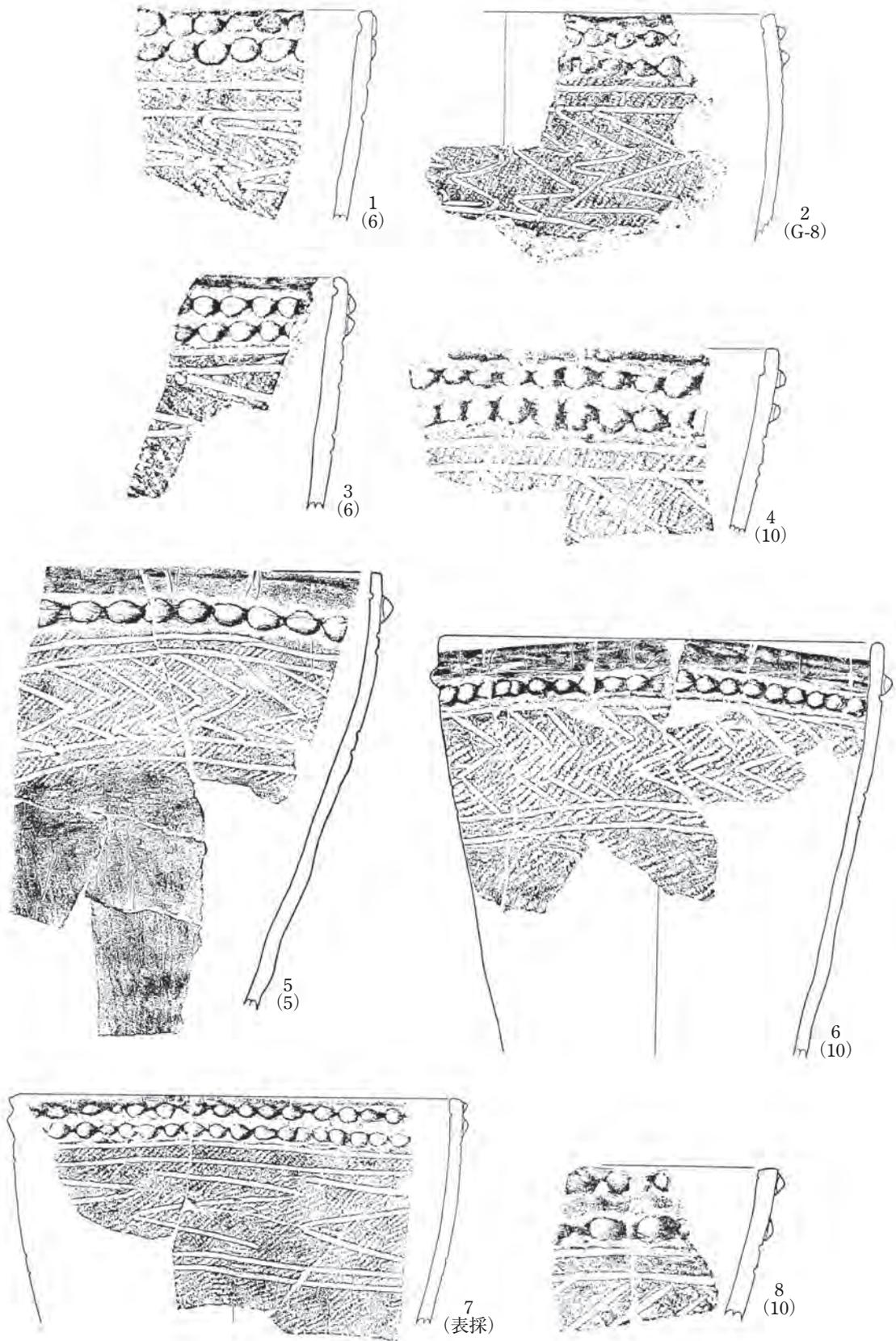


図6 寿能泥炭層遺跡出土粗製土器 (1、3～5、8 : $s = 1/3$ 、他 : $s = 1/4$ () 内土器集中地区など)

**A typological approach to the Kasori-B type pottery of the
Late Jōmon period (II)
—An attempt to clarify the Kasori-B2 type—**

OTSUKA Tatsuro

This article examines the Kasori-B2 type of the Late Jōmon period, a type which has been variously defined by researchers. Here, it is suggested that the Kasori-B2 type is most appropriately defined with reference to abacus-bead-shaped bowls.

2018年1月6日 印刷

2018年1月11日 発行

南山大学人類学博物館紀要 第36号

編集・発行人 南山大学人類学博物館

466-8673 名古屋市昭和区山里町18

Phone 052(832)3147 (直通)

印刷 株式会社クイックス

456-0004 名古屋市熱田区桜田町19-20

Phone 052(871)9190